

「さはみづからの祈りなりける」 釈義

今西, 祐一郎
九州大学 : 名誉教授

<https://doi.org/10.15017/7393739>

出版情報 : 語文研究. 139, pp.1-8, 2025-06-03. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :



「さはみづからの祈りなりける」 釈義

今 西 祐 一 郎

一

若菜上卷、女三宮の降嫁以後の物語は、今日、光源氏の色好みの犠牲者としての紫上の物語、いわば「紫上哀史」として、総じて暗く読まれている印象を否定できない。たしかに、若菜卷以降の紫上の物語は明るくはない。女三宮の降嫁は、紫上を六条院の女主人の座から引き下ろし、病を得てからの紫上は六条院を出て二条院に居を移し、六条院の女主人の座をまっとうすることはできなかつたからである。しかし、だからといって、紫上は苦衷の監獄に閉じ込められて苦悶してばかりいたわけではない。みづから言っているように、光源氏のもとで「ものはかなき身には過ぎにたるよその覚え」（一

一六四（五）^{（注）}を享受する恵まれた境遇にあった。それゆえ、みづからの苦衷を笑みとともに口にするような余裕を持った女でもあった。

たとえば若菜上卷には、次のような紫上の姿が語られている。それは、朧月夜への未練を断てない源氏が朧月夜と逢つたあとで、そのことをさりげなく紫上に告げた場面である。

うち笑ひて、「いまめかしくもなり返る御ありさまかな。昔を今にあらため加へ給ふほど、中空なる身のため苦しく」とて、さすがに涙ぐみ給へるまみの、いとらうたげに見ゆるに……（二〇七四）

紫上は「中空なる身のため苦しく（よりどころのない境遇

の私にとつてはつらい」と「涙ぐみ」はしたものの、「いまめかしくもなり返る御ありさまかな」と源氏の浮気を揶揄する言葉を「うち笑ひて」口にしたのだった。人は内に苦衷を抱えつつも笑みを浮かべたり冗談を言うことはできるのである。

このような観点から注目される紫上の言葉が、若菜上巻にはもう一か所ある。それは源氏が、三十七歳の厄年を迎えた紫上に対して自愛のための祈禱を勧めた場面で発せられた紫上の言葉、

物はかなき身には過ぎにたるよそのおぼえはあらめど、
心に堪へぬもの嘆かしさのみうち添ふや、さはみづから
の祈りなりける。
(一一六四～五)

源氏は、三十七歳を迎えた紫上に「さるべき御祈りなど、常よりも取り分きて、今年はつつしみ給へ」と息災の祈禱を勧め、さらに紫上が源氏から箱入り娘のように大切に庇護されてきた、たぐい稀な宿世の持ち主であること、女三宮の降嫁はつらいだろうが、自分は以前にも増して紫上を大切に思っている、といった慰めの言葉を口にする。

その方、人にすぐれたりける宿世とはおぼし知るや。思ひのほかに、この宮のかく渡りものし給へるこそは、なま苦しかるべけれど、それにつけては、いとど加ふる心ざしのほどを、御みづからの上なれば、おぼし知らずやあらむ。ものの心も深く知り給ふれば、さりともとなむ思ふ。
(一一六四)

前掲の紫上の言葉「心に堪へぬものなげかしさのみうち添ふや、さはみづからの祈りなりける」は、そのような源氏の言葉に応えたものであった。しかしその言葉はそこだけ取り出して考えると必ずしも意味明瞭ではない。「心に耐へぬものなげかしさ」とは、源氏の女性関係、花宴巻以来、いまだに続いている朧月夜との関係や世間が噂する朝顔との関係、そしてもつとも衝撃的であった女三宮降嫁ゆえの自身の苦衷をさす。そのような「心に堪へぬなげかしさのみうち添ふ」とが「みづからの祈り」であるとは、どういうことなのか。注釈書のいくつかを覗いてみる。

胸におさめきれない悩みばかり付いてまわるのは、それが私の身の祈りだったのですね。

(玉上琢弥『源氏物語評釈』)

私には心に堪えきれぬ嘆かわしさばかりが付いてまわっているかのようで、それは自分にとって祈りのようになっていたのです。
（『源氏物語の鑑賞と基礎知識』）

このように読む紫上の言葉を、秋山虔は「堪えられぬ物嘆かしさが、みずから生きる祈り、いいかえれば、それあってこそ生きることができるといふ言葉」と説く（『岩波新書『源氏物語』』）。他方、原岡文子は、紫上の「いのり」を、「いかにも突出した哲学的思惟を語るようでもあり、奇妙な違和感を拭い得ない」、「異色の語の使い方と言うほかない」と述べながらも、「もの思ひ」こそが生きること、苦悩が「祈り」となってそれに支えられる」という「哲学的」な解釈に回帰している（『紫上の「祈り」をめぐって』）。

しかし、このような解釈は、「心に堪へぬもの嘆かしさのみうち添ふ」苦衷と「みづからの祈り」とを、杓子定規にたとえば「1+1=2」という場合のような等号で結び付けているように感じられる。

二

それに対して、その結びつきのもう少し緩やかな捉え方も

注釈書には見出される。すなわち「心に堪へぬもの嘆かしさのみうち添ふ」という境遇ゆえに自分は今日まで生き長らえてきた、ということばかり「嘆かしさ」が結果的には自分にとって息災・長命の祈禱の役を果たしているのだった、という解釈である。次に掲げるのは、おおむねそのような理解を示すものと考えてよいであろう。

心一つにこらえきれない、何かと嘆かわしさばかりが、次々に付纏う事、それがまあ、私自身の生きる上の祈禱であったものか（それで緊張もし、今まで長らえて来たのであったものか）と思う。
（『日本古典文学大系』）

心に堪えられない嘆かわしさばかりがついてまわりますのは、それが私の祈りのようになって生きる支えなってきたのでした。
（『日本古典文学全集』）

私の心にはどうしても堪えきれませぬ悲しみの気持がつきまとして離れませんのは、それでは、それが私のためのお祈禱になって今まで生き永らえているのかもしれない。
（『新潮日本古典集成』）

仰せのように、よるべのないわが身にはよすぎる見た目
だろうが、こらえきれない嘆きがついて離れない、その
苦しみが、自分自身の祈りなのだった。嘆きがわが身を
ながらえさせる祈祷であつた、と言う。

（『新日本古典文学大系』）

しかし、苦衷と引き換えに命永らえてきたという理屈は、
紫上独自の発想ではない。実はその直前に語られていた源氏
の言葉を利用していたのである。厄年を迎えた紫上への息災・
延命の祈祷を勧めた言葉と、先に引用した紫上への慰めの言
葉との間で、源氏は必ずしも順風満帆とはいえなかつた自身
のこれまでを顧みて次のように述べている。

みづからは幼くより人に異なるさまにてことごとしく生
ひ出でて、今の世のおほえありさま、来し方にたぐひ少
なくなむありける。されどまた世にすぐれて悲しき目を
見るかたも、人にはまさりけりかし。まづは思ふ人にさ
まざまおくれ、残りとまれる齡の末にも、飽かず悲しき
と思ふこと多く、あぢきなくさるまじきことにつけても
あやしきもの思はしく、心に飽かずおほゆること添ひた
る身にて過ぎぬれば、それに代へてや、思ひしほどより

は今までも長らふるならむとなん、思ひ知らるる。

（一一六四〜五）

その要点は、自分は余人とは異なる生い立ちに恵まれ、今
たぐいまれな榮達を享受しているとはいえ、他方、近親、懇
意の人々に先立たれ、また禁断の愚行ゆえの物思いに纏われ
て満たされぬ思いを持ち続けてきた、そのような不如意を代
償として、今日の榮達を享けている、ということだ。山本利
達「紫上の論法——さはみづからの祈りなりける——」^(注3)が指
摘するように、紫上はこの源氏の論法を利用した。すなわち、
源氏の今日が以前の不如意の代償としてあるのなら、同様に、
世間からは恵まれているように見える自分の今日も、源氏の
女性関係によつてもたらされたわが身の嘆きを代償として得
られたのだと、婉曲に言おうとしたのである。「みづからの祈
り」という言葉は、前述の源氏による祈祷の勧めを承けての
言い回しであろう。

三

ところで、紫上はどのような言葉をどういふつもりで言った
のだろうか。あらためて問題の紫上の言葉を振り返ってみる。

物はかなき身には過ぎにたるよそのおぼえはあらめど、心に堪へぬもの嘆かしさのみうち添ふや、さはみづから祈りなりける。

源氏の多情がもたらした苦衷と引き換えに、みづからの過分な境遇が得られていたのだったと、紫上は本気で言ったのだろうか。源氏自身、自分の多情が紫上の心を痛めたことは自覚しつつも、常に相応の気配りを怠らなかつた源氏にとっては、その言葉は皮肉としか聞こえなかつたであろう。そのような言葉を紫上は本気で言ったのだろうか。

そうした観点から注目されるのは、はやく『岷江入楚』がその紫上の言を「たはぶれのやうにいひなし」た言葉だと指摘していることだ。これまで触れなかつたが、紫上は「さはみづからの祈りなりける」に続けて、次のように源氏にかねて望みの出家の許しを請うている。

まめやかには、いと行く先少なき心地するを、今年もかく知らず顔にて過ぐすは、いとうしるめたくこそ。さきさきも聞こゆること、いかで御ゆるしあらば。

(一一一六五)

この言葉こそが紫上の本意であり、それに先立つ「さはみづからの祈りなりける」は「たはぶれ」の言だとして、『岷江入楚』は次のようにいう。

これまでは紫上、源にたはぶれのやうにいひなし給ふ也。さて真実には行く末の命もみじかし。世をもそむかばやと也。

類似の見解は、山本利達前掲論文にも、

あなたの論法によれば、私の嘆きは「みづからの祈り」(わたしのする息災の祈り)だったのですね」その祈禱のおかげでこうして生きていくわけですねという気持ちを言外にこめて、軽くおどけたものであろう。

と記されていた。若菜巻の紫上をめぐる物語を、必要以上に「紫上哀史」として読むことを避けたい本稿の立場からは、歓迎すべき読解であるが、ただそれだけでは見解の相違として見過ごされ無視される恐れが大きい。

しかし、『岷江入楚』のような読み方に根拠がないわけではない。その鍵は、出家を請う紫上の言葉の最初の一語「まめ

やかには」という一語にある。その「まめやかには」は、たとえば「ほんとうに、(もう長くはない気が致しますのに)」「(玉上『評釈』)のように、たんに「本当に」と解されてもいるが、それは「まめやかには」ではなく、「は」のない「まめやかに」としての解釈であり、「は」の表す微妙なニュアンスを見逃している。「は」が添えられた「まめやかには」は、軽い発言、あるいは冗談めいた言葉のあとに、「本当のところは」と、本音を口にする際の逆接のニュアンスを示す場合もある句だからである。

「本当のところは」という句は、それに先立つ発言は「まめやかではない」「(本当ではない)」「冗談だ」ということにもなる。実際『源氏物語』においても、そのような例を真木柱巻に見ることができる。

四

夕顔の遺児を引き取って養女にした源氏は、その養女玉鬘への執心を抑えることができず、夫鬘黒の不在を狙って訪問し、玉鬘に向かって、玉鬘が他の男と三途の川を渡るとは約束しなかったはずだ、と歌を詠みかける。それに対して玉鬘は夫に背負われて三途の川を渡る前に、涙の川の水泡となっ

て消えてしまいたい、と歌で応じる。すると源氏はさらに、涙の川に消えたいとは何とも幼稚な考えだ(三途の川渡りは避けることができない)、(自分は玉鬘の夫ではないので)三途の川を背負って渡してやるわけにはゆかないが、手ぐらひは引いて渡してやろう、と畳みかける。

しかし、次に源氏は一転して、「まめやかには」、自分が世にもまれな色恋の不器用者で(女にとつて)安心な男だということはあなたも知っているだろう、という。念のため、後半の本文を示す。

女(玉鬘)は顔を隠して、

三瀬川渡らぬ先にいかでなほ涙の滯の泡と消えなん

「心幼なの御消え所や。さてもかの瀬は避き道なかなるを、御手のさきばかりは引き助けきこえてんや」とほほゑみ給ひて、「まめやかには、おぼし知ることもあらんかし。世になきしれじれしさも、またうしろやすさも、この世にたぐひなきほどを、さりともしなん頼もしき」ときこえ給ふを。(真木柱・九三八〜九)

この「まめやかには」について、本居宣長『玉の小櫛』は次のように述べている。

心をさなの云々といふよりは、たはぶれてのたまへる詞なるを、これ（注「まめやかには」よりは、たはぶれにはあらずの意にて、實にはといふこと也）。

「まめやかには」の一語を境に、それより前の発言は冗談（たはぶれ）、それ以後が本心、というわけである。

同様の例は浮舟巻にも見出される。匂宮は薫と偽つて浮舟の闖に侵入した。それを知った上に匂宮から従者時方を京に遣わすように依頼された浮舟の侍女右近は、それを時方に伝える。その際の右近に対する時方の返答である。

勘へ給ふことどもの恐ろしければ、さらずとも逃げてまかでぬべし。まめやかには、おろかならぬ御気色を見たてまつれば、誰も誰も身を捨ててなむ。

（一八七五〜六）

（匂宮の従者としてあなたから叱られるのがおっかないので、（京へ行けという匂宮の命令がなくても）退散するつもりだ。冗談はさておき実のところは、匂宮の一通りではないご執心を拝見しているので、我々は皆、必死でお供しているのだ。）

匂宮の従者時方も、まずは右近に冗談で応じ、ついで「まめやかには」という言葉とともに、匂宮に対する必死の献身を告げたのだった。

五

「まめやかには」の一句に焦点を絞り、問題の紫上の発言を宣長に做つて解すれば、「心に堪へぬ物嘆かしさのみうち添ふや、さはみづからの祈りなりける」は、『岷江入楚』が指摘していたように「たはぶれてのたまへる詞」であり、「まめやかには、いと行く先少なき心地するを……」は、「たはぶれにはあらずの意にて、實にはといふこと也」ということになる。「まめやかには」とは、そのような機能をもった一語なのだった。それは、冗談交じりの談話を、一転「本当のところは……」、あるいは「正直なところ……」、「冗談はさておき……」などと切り替える現代の話し法にも通じる。

冒頭で述べたように、若菜上巻、女三宮の降嫁以後の物語は、今日、光源氏の多情の犠牲者としての紫上の姿を語る物語、いわば「紫上哀史」として、総じて暗く読まれている面がある。また、夕霧巻には、夕霧に籠絡された柏木未亡人女二宮（落葉宮）の境遇についての紫上の思いが、

女ばかり身をもてなすさまもところせう、あはれなるべきものはなし。
(一三三五一〜二)

(いまにし ゆういちろう・九州大学名誉教授)

という言葉で語り始められている。その言葉は、秋山虔前掲書が言うように、女二宮に閑してだけでなく一般論として「女が女であることのために、人間として自主的に生きる術を奪われてあることに強く抗議する、が抗議したとてどうなるものでもないことに呻くがごとき物語の作者紫式部の、深沈たる思念」であると解することができる。

しかしそのことは、紫上が作中人物として源氏の多情を皮肉や冗談に紛らわして源氏に應對することを妨げるものではないであろう。

注

注1 『源氏物語』の本文は大島本により、適宜表記をあらため句読点を施し、『源氏物語大成』校異篇の頁数を付した。

注2 「国語と国文学」七七卷六号、二〇〇〇年。ただし、同趣の解釈はすでに古注にも見出される。「源しよそ心なとを、紫上のなけき給ふ、それかいのりと成て今までなからふるかと也」(『林逸抄』)。「人の目には心やすきやうなれと、身つからの上にては、いかほとも物を思と也。それは祈禱となりて、かやうに久しくはなからふと也」(『孟津抄』)。

注3 「国語国文」七三卷五号、二〇〇四年。